

## ●第 94 回日本生理学会大会（浜松大会）を終えて

第 94 回日本生理学会大会 大会長  
 浜松医科大学医生理学 浦野 哲盟  
 浜松医科大学神経生理学 福田 敦夫

第 94 回日本生理学会大会は 2017 年 3 月 28 日から 30 日の 3 日間、浜松市のアクトシティ浜松コンgresセンターを中心に行われ（写真 1）、メインテーマは「分子が奏でるハーモニーと躍動する身体機能：照らそう生命の理（ことわり）」としました。参加者数 1606 人で海外 18 か国からも 57 人の参加がありました（表 1）、総演題数 900 で、内訳は表 2 のとおりですが、教育プログラムと一部のシンポジウムをのぞいて、発表はすべて英語で行われました。

プレナリーレクチャーは 1000 人収容のホール（A 会場）に多くの聴衆を集めて行われました。初日に Yehezkel Ben-Ari 先生（Institut de Neurobiologie de la Méditerranée (INMED), France）による “Restoring harmony with Bumetanide in autism” と Kai Kaila 先生（University of Helsinki, Finland）による “KCC2: a multifunctional protein in brain development, plasticity and disease” が続けて行われ、発達期の興奮性 GABA のパイオニアであり、学問をリードし、現在は自閉症・統合失調症・パーキンソン病などの神経ネットワーク

（興奮-抑制バランス）障害が基盤にある疾患に対する治療に向け、トランスレーショナルな研究を精力的に展開している Ben-Ari 氏によるプレナリーレクチャーと、Cl<sup>-</sup>トランスポーター KCC2 機能の発達変化を世界で最初に報告し、神経発達における Cl<sup>-</sup>ホメオスタシスの学問体系を築いた Kaila 氏のプレナリーレクチャーと連続した時間帯にしたことは、この領域のさらなる理解によかったと思います。Peter Carmeliet 先生（KU Leuven, Belgium）の “Angiogenesis revisited: role and (therapeutic) implications of endothelial metabolism” は最終日でしたが、世界トップの研究者らしく、まさに最先端の内容でした。しかし、まるで映像を見ているかのようなリアルなプレゼンテーションが大変わかりやすく、皆さんが感銘を受けておりました。

特別講演では、Junichi Sadoshima（佐渡島純一）先生（Rutgers New Jersey Medical School, USA）の “Molecular mechanisms of heart failure: a central role of the Hippo pathway”, 岡野栄之（慶應義塾大学・医・生理）の “Brain Science using iPS cell technologies and genetically modified non-human primates” はいずれも生理学は如何にして臨床に役立つべきか、ということを変えて考えさせてくれる素晴らしい講演でした。岡田泰伸先生（総合研究大学院大学）の “Molecular identification of two types of volume-activated anion channels involved in multiple functions controlling cell life”, Claudio Rivera 先生（Institut de Neurobiologie de la Méditerranée (INMED), France）の “Depolarising GABA triggers glutamatergic sprouting in epilepsy”, Changjoon Justin Lee 先生（Korea Institute of Science and Technology (KIST), Korea）の “Role of reactive astrocytes in neurodegenerative diseases” は、細胞容積調節の分子基盤、発達期の興奮性 GABA とてんかん、グリアと GABA に関する病態など、講演内容に関連性があり聴衆にとっては理解が進んだのではないのでしょうか。萩原生長記念レクチャーは井本敬二先生（生理学研究所）に “Looking for next-generation physiology” と題してイオンチャネル研究の歴史から将来展望について、



写真 1. アクトシティ浜松のアクトタワー

表1. 参加者数

種別	事前登録			当日参加			総計
	国内	海外	計	国内	海外	計	
一般（会員又はFAOPS圏内会員）	802	7	809	131	2	133	942
一般（非会員）	44	7	51	156	2	158	209
非会員（シンポジウム座長・演者）	114	12	126				126
大学院生（博士）	109	8	117	11	2	13	130
大学院生（修士）	74	10	84	0	1	1	85
学部学生・専門学校生	68	2	70	31	1	32	102
招待者	1	11	12				12
合計	1212	57	1269	329	8	337	1606

表2. 演題数

種別	演題数	備考
プレナリーレクチャー	3	
特別講演	5	
記念レクチャー	2	
企画シンポジウム	79	（シンポジウム数18）
公募シンポジウム	187	（シンポジウム数42）
一般演題	598	（ポスター数607）
受賞演題	9	
教育プログラム	13	（プログラム数4）
ランチタイムシンポジウム	4	（シンポジウム数2）
合計	900	

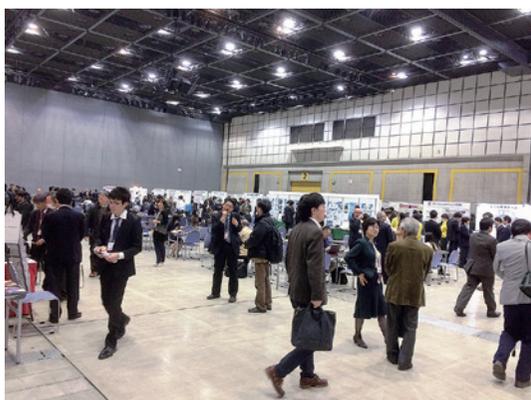


写真2. 展示・ポスター会場

田原淳記念レクチャーは理事長の丸中良典先生（京都府立医大）に“Regulation of body environments by epithelial ion transport”と題して細胞

内Cl<sup>-</sup>の生理機能の多岐にわたる話をさせていただきました。いずれも「これぞ生理学」といった感じで内容の濃い、印象に残るものでした。

大会企画シンポジウムとして、パーキンソン病の生理と臨床、てんかんの生理と臨床、神経細胞/回路発振現象の実験と理論、タウリンの生理機能、遺伝学と生理学の融合によるてんかん病態の理解、視床下部の機能における新たなGABAの役割、メカノバイオロジー、細胞代謝と機能の連関等に関するものが開催されたほか、生理学会の各委員会の企画によるシンポジウムが行われました。その他にも、公募によるシンポジウムや一般演題のポスター発表（写真2）が数多く行われ（表2）、それぞれの会場で活発に質問・議論が展開されましたが、とりわけ海外招待者の積極的姿勢は他の参加者にも大きな刺激を与えてくれたのではないのでしょうか。特に今回は海外から57名、国内在住者も含めると100人以上の外国人の参加があり、各会場での活発な討論も英語で行われました。

表 3. 関連イベント参加者数

種別	事前登録	当日参加	計
全体懇親会	245	32	277
市民公開講座	102	11	113

また、Overseas Young Physiologist Award を 5 名の方に授与し、閉会式では表彰も行いました。今後の大会でもこのような流れを続けていけば、海外からの参加者をもっと増えると確信しています。さらに、大学院やポスドクとしての留学生の増加にもつながり、ひいては日本生理学会の益々の発展につながるのではないのでしょうか。

参加者の研究交流と親睦を促進する目的で全体懇親会を大会 2 日目に会場内の展示イベントホールで開催しました(表 3)。270 名を超える参加者があり、Ben-Ari 先生の祝辞(ジョーク)と乾杯の音頭によって和やかな雰囲気の中で始まり、歓談の輪があちこちでできていましたが、あっという間に時間が過ぎてしまいました。また、例年行われているグループディナーも多くは大会 1 日目に会場周辺で行われました。その他にも大会前日に市民公開講座が開催され、こちらも盛況でした(表 3)。

大会の財務的には広告協賛が 33 件(企業・団体)、寄付・助成金は個人と団体で 17 件、出展企業は 26 社 34 ブース(写真 2)で数多くの協力をいただきました。残念ながらランチョンセミナーの契約を取ることができず、やむなくランチタイムシンポジウムとして大会側で軽食を用意することしかできませんでした。参加者の皆様にはご不便をおかけして申し訳ありませんでした。しかし、



写真 3. ありがとうございます!スタッフ一同

その反面、企業あるいは文科省の研究助成事業との共催シンポジウム(いわゆる冠つき)は実に 10 件を数え、今後の大会運営に向けたよい事例になったと思います。浜松での大会開催はちょうど 20 年前の第 74 回以来でしたが、幸い 3 日間とも晴天と暖かな天気恵まれ、会場間の移動も苦労なく行えました。ただ、残念だったのは例年だと近くの浜松城公園の桜が満開のはずだったのですが(前は回はそうでした)、今年は暖冬にもかかわらず桜の開花が例年より 2 週間も遅く、ポスターのような光景にならなかったことです。最後になりましたが、第 94 回日本生理学会大会の成功は学術の発展と国内外の生理学者間の研究交流と親睦に大きな効果をもたらすことができたと自負しております。おかげさまで来年の高松大会に向け良い流れを作れたのではないのでしょうか。ここに感謝の意を表します。どうもありがとうございました(写真 3)。